

郡内研究

第 4 号

尾縣学校設立について

井 上 敏 雄

尾縣郷土資料館は、雑誌世界、月刊文化財、朝日百科等に掲載され広く知られるようになり、最近建設省から赤レンガの東京駅、大阪市中央公会堂の保存の動きをはじめとして、昨今、いわゆる「近代建築の保存、活用」についての社会的関心が非常に高まりつつある。こうした状況に鑑みて、歴史的及び文化的に価値の高い、全国各地に残る近代建築物のなかから主要なもの約五百件を選定した。」尾縣郷土資料館もその一つになったと通知があった。

また平成元年四月、日本大学文理学部教育学科の主任教授石井正司先生が新人生のオリエンテーションに約百三十名の学生を連れて来館され、日本教育学史上の重要な文化財であると評価してくれた。東京農工大名誉教授で産業考古学会の会長金子六郎先生が学会の先生方と来館されたのをはじめ多くの知識人が来られるようになった。

た。然し設立当時の資料が少ないので建設についての意見が、幾つかに分れている。そこで残されている資料を整理し「禾生村誌」（明治四十三年発行）、中野八吾先生の「学校沿革誌」など参考にしながら調べて見た。禾生村誌には

明治六年九月二日、小形山村を学区とし、第一大学区、第四十五番中学区、第一番公立谷村学校分校と称し村内山本八郎兵衛隠宅に於て創立す。

明治七年九月一日村内清水市右衛門宅に移転す。と書いてある。山本八郎兵衛は文久二年正月十三日、三代七の長男として生れ明治六年六月二十一日十一才で相續している。この年で隠宅とは変であるがこの家の家号が「おきの隠居」というので間違えたと思う。集落の中央から離れた通学に不便な場所であるが、八郎兵衛の孫山本好一氏が、三代七は寺小屋のような事をしていたという、そんな関係で分校を引受けたのかも知れない。

清水市右衛門の名は明治三年十月の『苗氏御免御請連印帳』及び明治十四年三月十一日の「本村戸長選舉人名簿」に記載されているが明治二十二年越路に共同墓地を造った時、清水姓の家は全部一カ所に集ったがその中に

はない。この時すでに小形山に住んで居なかったようだ。家があった場所は名簿等に書かれた順序から清水武子氏の家の近くでなければならないが誰も知る人がない。明治六年の山梨県史によれば谷村学校は明治六年十月十四日開業所屬村、上下谷村、古川渡、井倉、四日市場、小形山、田野倉、川茂とあるのでこの日に分校が発足したものと考えられる。

明治七年十一月十三日の「借入金之証」に「右之通谷村学校分校当小形山学校資本金の内借用致候」と書いてあるので分校当時は小形山学校と呼ばれていたと思う。

明治七年十一月二十四日、学校資本金を寄附した者に褒賞が授興された。その中で十円以上寄附した者の名簿がある。小形山村が二十七名、川茂村が二十三名で小形山が百五十戸、川茂が五十戸程であったその当時小形山に比較して川茂は豊かな家が多かった。この時、学校世話掛も県から任命され学校建設の第一歩が踏み出された。

次に記す文書がある、これは昭和八十年夏資料館にあった大きなダンボール箱一杯の不要と帯封された文書の中から探し出されたもので、一緒にあった他の文書から考えて鈴木徳寿家文書である。徳寿氏の祖父貫一は昭和十

九年三月八十三才で亡くなっている。生前神主を業とし易を占い学問を好んだ。大正二年三月十六日、貫一がその親、彦右衛門の墓を建てた墓石には筆子鈴木七右衛門、渡辺重五郎と書いてある。この文書は寺小屋の師匠をしていた彦右衛門が書いた。末尾に彦右衛門と書いてある。文書は三枚あるが覚授人足記と書かれ、そのすぐ後の日付が「〃」と書いてあるのでその前があった事は確実である。明治八年一月十九日古川渡を中心として禾生村が誕生し、小形山村は小形山区となったのでそれまで村役人が書いていた官役、または人足賃支払い等のための覚書を区の何かの役をしていたので区のために書いたものと考えられる。

覚授人足記（鈴木茂治先生読下し）（その一）

〃 式人
新暦十月卅一日（明治九年）
一 拾人 材木出シ
〃 十一月二日
一 〃 建揃
〃 三日
一 〃 〃

一 十一月四日 外ノ衆者御□

一 拾五人 〃 早仕舞□□

増共 者暮ル迄遺

〃 五日 通

一 拾五人 〃

壺ト附置候得共

六日

一 拾壺人 材木出シ

〃 十二月八日

一 四人 歩行係ケ

〃 〃 廿日

一 壺人 先山

立岩法澤

同廿五日

一 登セ石積ミ村請

五月卅日

一 川中古粹詰メ

間木出ス村請

六月八日

一金三圓也 中谷

かし おさよ女

七月一日登セ水拂瀬ギ石積上瀬ギ

金壺分式朱ト

貳匁五ト 穴下よりハばかり太子堂迄土手

一人 同ク
 〃 四日 一人 同ク
 〃 五日 真木矢淵橋荷間
 一人 出ル
 〃 十七日
 一人 學校道具出シ
 〃 廿三日
 一人 地検出ル 向田
 一月九日 ワクラハチマン
 一人 フジクボ
 〃 十九日 地検出ル
 一人 松ば入
 明治十丑季學校普請
 十月四日 カベ
 一人 足五人 新打壁
 〃 八日
 一人 足八人 裏返シ壁
 寅ノ三月十三日 學校樹金山
 一人 より松コギ植ル

明治十一年覚

四月十八日 川中出

熊吉

一人 足一人

〃 廿五日 川中出

同人

一人 足一人

真木拾二本

五月二日

一人 足一人 水瀬込出ル

同人

〃 五日

一人 足一人 学校開道作り

同人

御普請

寅ノ六月廿四日

一金 壹分貳朱 熊吉

ハヅカリ

また次に記す文書がある。

請負之証

〃 十四日 熊吉 學校樹中谷
 〃 十五日 植木コギ又天勾山
 〃 舟場橋荷
 一人 間出シ 熊吉
 明治十一年寅年
 四月十八日
 御普請
 川中ニ出ル 熊吉 前梓結メ
 同廿五日 同人 向梓結メ
 〃 出ル間木出ル
 五月二日 同人 瀨キ込ミ
 〃 出ル 三日 ハヅ又ハヲカリ
 御普請 唄狩リ
 寅ノ六月廿四日
 一人 金壹分貳朱 熊吉
 〃 テ四日出ル
 二人 良ハヨリ来ル
 彦右衛門

(その三)

一西洋作學校二階附一棟 表口七間

一錢印紙

但シ此間表矢倉ニ付奥行七間

此請負金四拾円他 但出来迄左官手間料

扶持米アクフノリ共

右學校乃壁塗窓共左官一式前書之通四拾圓ニ而取極メ請
 負申處実正也且右金之内手附金トシテ金拾円御渡被下正
 ニ受取申候殘金之儀ハ新打之節貳拾円尚又皆成之旦金拾
 圓御渡被下候作事向之儀ハ可成丈入念手拔等無之様来ル
 子ノ四月迄ニ無相違成功可仕候仕上不宜廉ハ如何様トモ
 御差図之通相直シ可申候若又萬一病氣等ニ而不得止事故
 出来之節ハ代人相立御差支不相成様可仕候依之受負証差
 出申處如件

都留郡第一區

禾生邸ノ内旧小形山

明治八年

請負人 渡 迎 重三郎 印

亥十二月十八日

証人 平井市郎右衛門 印

同 断 平井 源左衛門 印

學校世話掛御中

この文書に書いてある三人は皆小形山原の住人で渡辺重三郎は明治年間是小形山に住んでいたがその後熱海に引越し子孫は現在熱海に住んでいる。証人二人の子孫は現在も小形山に住みこの証人になって迷惑したという話は聞いていない。工事は順調に仕上がったと推測される。左官工事は先ず木舞^{こまい}かきから始まる、この木舞に使う篠竹は十二月末までに切ったものでないと虫が入って長持はしない。十二月十八日までに十円受取、篠竹や、木舞に使う小瀬縄^{せなわ}など用意したものと思う。この当時は建て前と同時に木舞かきに着手して新打をし、裏返し壁を塗って貫を隠す。その上に何回も塗って仕上をする。昭和四十八年に行なわれた改修前の外壁はほとんど板の鎧壁であった。こんな外壁は左官工事が終って三カ月、長い時は半年も経って工事されたという。改修以前の二階の正面の壁などは厚さ十糎もあり立派なものであったと聞く。人足記に明治七年十二月から明治八年十一月までの記録がないので確実の事は分らないが伝聞に依ると明治七年の十二月から明治八年の一月にかけて臼木^{うすき}の奥の三ノ沢にある現在学校山と呼ばれている村持の山の木を伐つ

建築関係の記事は机や椅子などの家具や学校の裏に建てられた教員住宅や便所及びそれらを結ぶ渡り廊下などの作業であったと思う。

明治十年寅の三月十二日、学校庭ならし、前道土ならしなどの記事がある。学校が完成し四月一日の独立開校のための準備と考えられる。山梨県史には「明治十年設立校名尾形、教場数三生徒男子五十六名女子一名。明治十一年五月五日校名尾県」明治十二年に書かれた明治十一年山梨県内公学校表には「校名尾県設立明治十年生数男子五十三名女子二名」と書いてある。毎年新入学生が入り生徒数が増え教場も多く必要となり、民家では対応できず明治十年建築成った新校舎で独立した。校名は、川茂も多くの資本を出し兩地区協力して造ったので小形山学校では川茂からの反対も考えられるので文字も替え山を取り尾県としたと推測される。

明治十年丑十二月の事務御達写帳に次のような文書がある。

御拝借金之証

一金百圓也

右者去ル九月十一日末曾有之大災ニテ当村尾縣學校悉

て近道である臼木沢から搬出したと伝えられている。

これ等の資料に基づいて、明治八年十二月十八日以前建て前をし、九年の四月末頃左官工事が終り九月から十一月頃までには外壁も仕上がったと考えられる。九月十日に花火を打上げる許可を戸長の奥書印形までして県令に願ひ出ている。この村では大きな仕事が一段落した時には花火を揚げる習慣がある。県令の返書は

其ノ村ノ儀ハ未ダ學事隆盛ノ場合ニ不至候得ハ掲火等ノ元費ヲ省キ學校資本ニ尽力候様可致事

明治九年九月六日 山梨県令藤村紫朗

と書かれていた。この時はまだ完成していなかった。

寛技人足記（技は、カフ、チウと読み計算するという意味がある）には橋の架け替、二ヶ堰水路の維持管理、地検等区の重要な事業が書かれているが学校の建築に関する記事も多い。明治八年十二月頃の先山に出る（建築材を切り倒すこと）は外壁や造作用に使う木を切ったものと考えられる。十二月、木が水を揚げない時季に切り三カ月位葉干し（常緑樹等の葉が枯れて赤くなるまで切倒したままで置く）すると木は腐らず虫も喰わず長持がする。明治九年の十月末から明治十年の一月にかけての

毀壞仕候得共迎モ所屬人民ニ於テ補裡ノ餘力無之ニ付前書之金員正ニ御拝借仕候ニ相違無御座候然ル上ハ御返納之義ハ来ル明治十一年十一月卅日限無相違御納可仕候為後鑑村総代連署仕差上候處如件

第三十三区

禾生村

明治十年十二月 日 安中戸右衛門 印

関口 逸 印

鈴木 正明 印

平井 直盈 印

天野 藤一郎 印

戸長

佐藤 隆亮 印

山梨縣令藤村紫朗殿

この文書から、県史に明治十年校名尾形と書いてあるが、誤字で始めから尾縣であった事が分かる。また壊れるという事は建物が存在していた事を立証する。ことごとく毀壞した事が事実であれば百円借りただけではどうにもならず、またその時から木を切り再建築して明治十一年五月五日の開校式までに完成する事は不可能である。

この表現は誇大ではんの一部の破損であったと思う。昭和初期学校の横の樹令千五百年といわれた国の天然記念物であった大樺の枝が台風の時落ちて学校が壊れた事がある。それと同程度の事があったのかも知れない。人足記には「明治十五年季学校普請、十月十四日カベ、人足五人新打カベ、八日、人足八人裏返シ壁」とだけ書いて大きな工事をした形跡はない。(この人数では十坪以下位しか塗れない) 明治十年十二月十二日の内試の合格証があるので授業も続けられていた。

明治十一年寅の人足記に「三月十三日学校樹金山ヨリ松コギ植ル熊吉、十四日学校樹中谷利右衛門様方ノ植木コギ、又天句山」と書いてある。玄関に向って右側に枝ぶりの良い大きな赤松があったが昭和四十五年頃枯れて切られた。利右衛門とは山本晃氏の曾祖父である、入口左側にある大きな柘植^{ツヅキ}の木がそれであると思う。

天狗山は中央自動車道の工事前、学校の裏近くまで続いていた山でここから藤を取って来たのかも知れない。白い花の咲く大きな藤棚があった。準備万端整って明治十一年五月五日藤村県令を迎えて盛大に開校式を行なった。この日人足記に「人足老人学校開道作り熊吉」と書

いてある。道路も人足を使い念入りに整備したと思う。小学校は下等(普通)上等(甲科)が各八級から一級まであったが、明治十三年の尾県学校の甲科三級前期後期の卒業証書があるのでこの頃は尾県学校で甲科の授業も行っていた。禾生高等小学校が創立したのは明治二十五年七月一日である。

明治十四年の村長事務引継書には「学校建築の費用およそ千二百円」と書いてある。

註

建揃 建て前に使う道具や用材も用意すること

先山 建築用の木を切り倒すこと

小屋掛 工事用の作業小屋を造ること

法澤 横吹きの下の二ヶ堰水路に桂川から水を取入れていた場所の地名

立岩(建岩) 法澤の横の地名

太子堂 川茂浄泉寺の太子堂

荷間出ル 川に丸太を二本渡して橋桁を造ること

道具出シ 建築用材を搬出すること

ハチマン 中央自動車道花咲トンネル手前左フジコ側の地名

新打壁 木舞の上に土を塗ること(これが壁の下地になる)

裏返シ壁 新打壁の反対から塗って貫を隠すこと

木舞かき 壁の下地にはる竹組をつくること

小瀬縄 木舞の竹組をする時使う縄

葉干 木を切り枝を拂わず倒しておくこと(蒸発する面積が多いので木材の水分を早く取除く事が出来る)

物見台(塔屋)

表矢倉

アク 白壁を作るために使う消石灰

補裡 改修

掲火 花火をあげる

会務報告(二)

「古文書教室の概況」

三年前に再開された古文書教室です。年々希望者が増加してきましたので、今年度は三つのコースを設けて、六月から毎月一回のペースで実施しています。各コースそれぞれ熱心な受講者に恵まれて、いずれも所期の成果をあげつつあります。では各コースの紹介を兼ねて現状をお知らせします。

初級コース(開講日第二日曜日・講師 鈴木茂治氏) 市内のほか秋山村・大月市・西桂町・富士吉田市など各地から二十七名に及ぶ多士済々の受講生です。教材は市内旧家所蔵の「天保飢饉」関係のものです。

中級コース(開講日第三日曜日・講師 小林安典氏) 昨年に引続いて中級に進んだ二十名が受講生です。教材は主として市内旧村の「年貢割付帳」等です。

研究コース(開講日第四日曜日・講師 棚本安男氏) 三年目の十四名がそのまま受講生です。三グループに分れて境村米山家文書「万年内家業一件帳」(通称 米山家日記)の解説書写に取組んでいます。(鈴木記)